

# No Worries, Mate!



## 藤田正博

上智大学理工学部物質生命理工学科  
[102-8554] 東京都千代田区紀尾井町7-1  
教授, 博士(工学).  
専門は導電性高分子, イオン液体.  
masahi-f@sophia.ac.jp  
<http://www.mls.sophia.ac.jp/~polymer/index.html>

もう15年経つのかと感慨にふけている。学位取得後、モナッシュ大学（メルボルン）にてポスドクとして働く機会を得た。夫婦共々。大変失礼な言い方ではあるが、オーストラリアに興味があったわけではなく、たまたま職を得たのがオーストラリアであった。しかし、これが最良の選択であったと今は思っている。

働き口を探している中で、後にボスとなるMacFarlane先生から、オーストラリア研究会議（ARC）のグラントに申請してみてもと勧められ、素直に従ったところ、おそらく人生の大半の幸運を使ったことで申請書が採択され、メルボルン行きが決まった。その後、同門の妻の就活が始まった。勤務地はメルボルン一択である。元指導教員である東京農工大学の野弘幸先生が尽力してくださり、妻も同じ研究室でポスドクの職を得ることができた。深謝。これは笑い話であるが、MacFarlane先生は、日本から来るポスドク2名が夫婦であることを知らず、メルボルンで対面したときに「君たちは夫婦なのか？」と確認された。忘れられない思い出の一つである。こうして、メルボルンでの2年に及ぶ生活が始まったわけだが、善し悪しは別として、われわれ夫婦にとって仕事と私事がすべて重なる期間でもあった（私にとって“悪し”はなかったです、念のため）。渡豪して間もなく、オーストラリアについての知識はないに等しいことに気づいたものの、のんびりとした雰囲気の中、みな親切であったため、真に困ることはなかった。むしろ、みな17時に退勤し、家族や友人とアフター5を謳歌するライフスタイルはきわめて新鮮であった。暮らしてみても、オーストラリアがワークライフバランス先進国の一つであることを実感した。さて、豪に入っては豪に従え、もとい郷に入っては郷に従えということで、平日のアフター5に、研究室のメンバーとゴルフコースに繰り出したり（メルボルンは緯度が高いため、サマータイムの期間は夜9時過ぎまで明るかったと記憶している）、ジャズバーで優雅な夜を堪能したりと新しい試みに果敢にチャレンジした（注：毎日ではない）。そんなこんなで、メルボルンライフ（研究も含めて）を思いっきり満喫していたある日、私事で一大イベントを迎えた。長女が生まれたのであ

る（異国の地で第一子を出産した妻の頑張りに敬意を表す）。詳細は割愛するが、まるで身寄りのないわれわれ夫婦が長女を授かり、無事に子育てすることができたのは、メルボルンだから可能であったと思っている。上司・同僚の理解およびサポートに始まり、ビクトリア州独自の地域サポート制度も利用できたことは大変ありがたかった。

さて、肝心のワークであるが、大学内も分業制が確立されている。野球にたとえば、先発、中継ぎ、抑えの役割分担がはっきりしている（むしろ、わかりにくい？）。安全教育および安全管理の職員、IT関連（ネットワーク設定、ソフトウェアのインストールなど）管理の職員、さらに学会のポスター（デザインやレイアウトも整えてくれる）等を印刷する職員もいることには驚いた。つまり、教員は教育と研究に集中できる。日本は、沢村賞に代表されるように先発完投が美德とされている（私も先発完投型の投手を好む）。日本の大学で研究室を主宰するということは、ほとんどの場合、一切切を教員がこなさなければならない。私のように得手より不得手が多い教員でも、生産性を落とさずに、ワークライフバランスを維持するためには、分業制の確立が不可欠であろう。日本人の勤勉さは武器の一つであるものの、それだけに頼ったシステムはいつか破綻する。オーストラリアの価値観を学びつつ、日本独自のシステムが生まれれば良いと思う今日この頃である。

ここまで読んでくださった方々には、ほんの一例とは言え、私がいかに計画性のない、無謀な人間か推測いただけたと思う。時には考え過ぎず、ただ飛び込んでみるのも重要と思っている。結果論ではあるものの、飛び込んだからこそ、かけがえのない2年間をメルボルンで過ごすことができ、現在の交友も含めて人生の貴重な財産を得ることができた。海外で暮らすリスクや困難さだけを真正面から受け止めていたら、日本に留まっていたであろう。しかし、どこでどう生きていこうとリスクは付きものである。海外での武者修行に限らず、いろいろなことにチャレンジして欲しいと切に思う。No worries, mate!